

# 岡山県津山市神代の自治組織と地域づくり

—地域活動と運営の継承に注目して—

神 田 竜 也\*

## I. はじめに

政府が1970年代に掲げたコミュニティの復権には、住民自治の衰退と行政サービスへの過度の依存が背景にあった(森岡, 2008)。しかし、行政側からのコミュニティ政策は大きな実をあげることができなかつた。地元住民側からすると、上からのお仕着せの活動という思いが強かったと考えられる。その後、1990年代以降になると、地域と外部との関係を取りもつ非営利活動法人(以下、NPOとする)が台頭してきた。その背景には、従来のような町内会や自治会だけでは地域社会の存続が望めず、人びとのつながりを重視することが主張されてきたからであろう。すなわち、その主体が、水平的横断的な結びつきを有する、異質な者どうしの集団やNPOであったといえる<sup>1)</sup>。ただし、そうであるからといって、集落や町内会という旧来の自治組織の意味が喪失されたわけではなく、これまでの継続した活動や地域づくり、運営の仕組みを看過することはできない。

本稿では、自治組織の地域活動やサポート面、地域運営の継承に目配りして、地域づくりのあり方を検討する。研究対象地域としては、岡山県津山市神代を取り上げた。当地区は、自治組織である町内会を中心に、各種団体のサポートを得て地域活動が推進されてきた。その背景には、各組織団体の有する諸機能と、運営における上から下の世代への継承があると考えられるが、当地区では青壮年が地域活動の多くにかかわってきた点が注目される。

構成は以下のとおりである。第1に、対象地域の津山市久米地域および神代地区の概要を述

べる。第2に、神代の自治組織である神代町内会と、その組織構成や地域活動を検討する。第3に、有志により結成された神友会と神栄会を取り上げ、成立経緯、地域活動の中心層が果たした役割を明らかにする。

本稿では、地元住民への聞き取り、筆者自身の総会や活動への参加によって得た知見、内部資料や地区誌(神代のむかしを語る会編、2001)をおもな資料とした<sup>2)</sup>。

## II. 研究対象地域の概要

津山市に吸収合併された久米町は、市の南西部に位置し、面積74.86km<sup>2</sup>、南は美咲町、西は真庭市と境を接する。旧町北部の平地には、中国自動車道、国道181号およびJR姫新線が東西にのび、久米川が東に流れている。町域中心には、久米支所や中学校、運動公園など公共施設がある。一方、南部はなだらかな山谷が広がり、谷沿いに集落や水田が点在する。

2019年1月時点の久米地域人口は6,538で、高齢化率は38.9%となっている。地域全域は過疎地域に指定されている。しかし、旧町域には工業団地があり、また旧津山市中心へのアクセスもよく、就業機会には恵まれている。

対象地域の神代はいわゆる大字で、亀甲、多汲屋、成友、大上、神西の5つの字からなる(図1)。行政的には、神代、一色、南方中の3大字を大倭(やまと)地区とよぶことがある<sup>3)</sup>。神代には、南北にやや広めの谷沿いに神代川が流れ、国道181号から美咲町へ久米中央線が走っている。谷のゆるやかな斜面上には水田が開け、まとまった集落を形成している。

\*倉敷翠松高等学校・非常勤講師

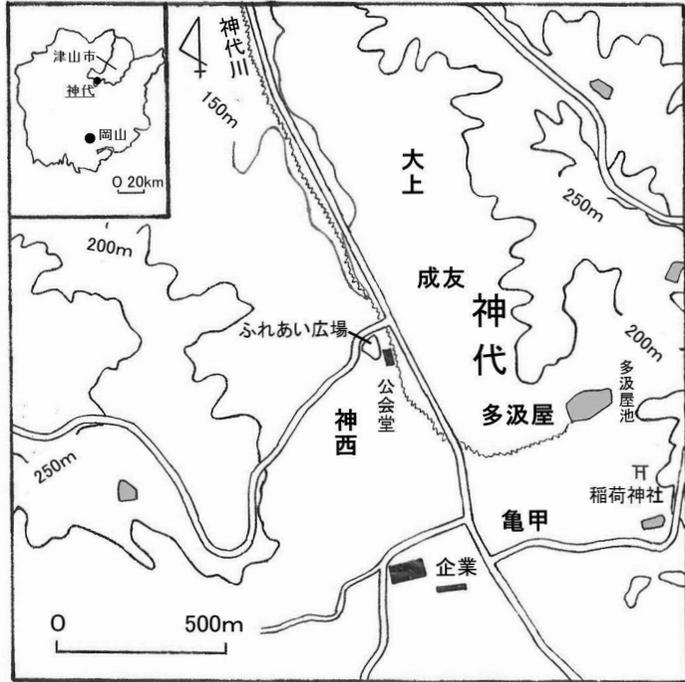


図1 研究対象地域  
注) 等高線は50mごとに表記。

神代の総戸数は戦後から1975年までは90戸程度、1995年84戸、2018年79戸で推移している。『津山市統計書』によると、神代の人口は293人(2019年1月)で、このおよそ10年間はほぼ横ばいで推移している。高齢化率は34.5%で、久米地域全体のそれより5ポイントほど低い(なお、津山市全体の29.9%より5ポイントほど高い)。5歳階級別人口をみると、70～75歳が25でもっとも多く、これについて35～39歳やその子らに相当する5～9歳も多い(図2)。聞き取りによると、親、子、孫の3世代居住が多い。転出が少ない背景の1つには、やはり津山市の通勤圏で就業機会があることがあげられる。

また、1970年代以降、神代には舗装工事や電子関連の企業などが進出している。おもな進出企業を2つあげる。P社は、神代自治会(現在の町内会)が誘致した結果、1972年に当地区に立地した。事業内容は、道路の舗装工事、舗装材料の製造である。Q社は、町の誘致により

1991年に岡山工場を建設した。事業内容は電気製品、情報関連機器などの組み立てである。企業との関係・共生は避けては通れない。町内会とのかかわりについては次章で述べる。

### Ⅲ. 神代地区の自治組織

#### 1. 町内会について

合併後の新津山市においては、広域の津山市連合町内会がある。そのなかに旧市町村に該当する各支部の連合町内会があり、このうち久米地域は30の字・地域による久米連合町内会が構成されている。

神代町内会には全戸79戸が加盟する(2019年4月)。組織構成は、会長1人、副会長2人、会計1人のいわゆる3役のほか、監査2人、連絡員8人がいる。連絡員は、小字単位で1～2人が選出され、行事予定や役員会での決議事項などを各家に伝達する。各役職の任期は2年で、

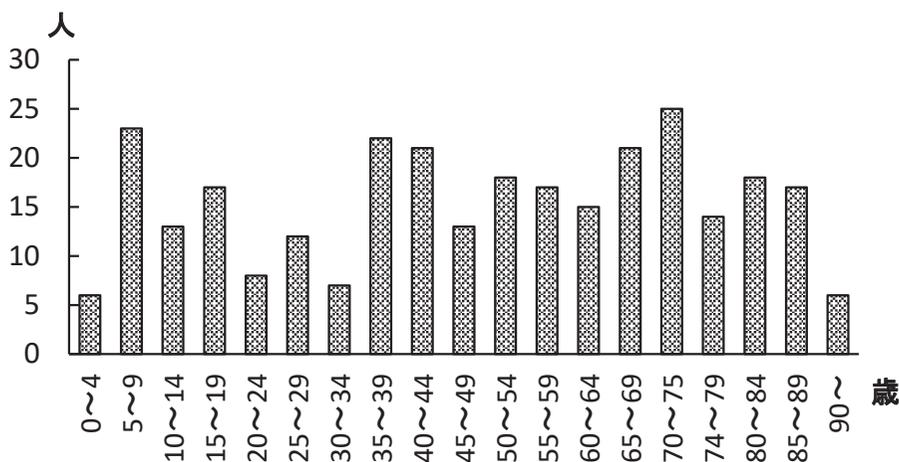


図2 神代の5歳階級別人口 (2019年)

資料：『津山市統計書 平成30年度』による。

重任は妨げない。事実、会長や副会長職は、2期務めることが慣例となっている。

ここで歴代の代表者を概観する。1897（明治30）年には、大字を代表する評議員が選出され、その長は評議員長である。大字の代表は、1921（大正10）年からは区長、1976年からは自治会長となる。地区誌によると、区長以降から1997年就任までの代表は計15人であった。就任期間は例外的に1年の者をのぞき、6～7年継続する者が多かった。今日の役職選出は選挙であり、就任時期が短くなっているように思われる。

## 2. 地域活動と財政状況

表1は、神代のおもな年間行事を示す。行事には、神代の範囲内と大倭地区など広域におよぶものがあり、後者の主要行事も少なくない。

神代の年間行事としては、運動会・花見、神代稲荷納涼祭・秋季大祭などがあげられる。運動会は、1984年に町の補助をうけてふれあい広場を整備したことが発端である<sup>4)</sup>。4月の第1日曜日に開催され（雨天時は中止）、小字の間での対抗戦で、グランドゴルフやパン食い競走、

玉入れなどの競技が行われる。神代は2つの神社の氏子を擁し、うち全戸が該当するのが稲荷神社である。ここの秋季大祭は、10月の第2月曜に開かれ、五穀豊穡を祝う<sup>5)</sup>。

一方、広域にわたる行事については、その1つが5町内会からなる大倭地区のコミュニティ協議会に関係する。聞き取りによると、この協議会は、1990年代に旧久米町学習館が開館されたときに結成された。同様の他地区の組織とともに、納涼祭や文化祭など文化事業、ふるさとまつり、グランドゴルフなどを行っている。また、近年は大倭地区において小地域ケア会議も開催されている。この会議は、津山市の地域包括ケアシステムを推進するものとして、市の連合町内会の支部単位で設置される。すなわち、地元住民と介護や福祉など専門職の連携を通じて、高齢等で支援を必要とする人への対応や、地域の課題解決を図るものである。2019年時点の活動中心は、地域課題の整理や共有であった。

つぎに、町内会の財政を確認しよう。表2は、2018年度神代町内会の決算書を示す。収入では、一般的に確実な部門として、各戸から

表1 神代地区の年間行事

月日	行事	備考
4月 第1日曜	運動会・親睦花見	神代グラウンド
第2日曜	神代町内会総会	
5月 1日	高津神社春季大祭	
上旬	大倭コミュニティ協議会定期総会○	
6月	大倭地区小地域ケア会議○	2018年度は5名参加
7月 第4日曜	神代稲荷納涼祭	2018年度は約230人参加
8月 第1土曜	大倭地区納涼祭○	健康教室・カラオケクラブ・ 焼きそば会の出店
9月 中旬	敬老会	
10月 第2日曜	高津神社秋季大祭	氏子は神代地区内65戸
第2月曜	神代稲荷秋季大祭	地区内全戸が該当
第4日曜	大倭地区三世代グランドゴルフ大会○	
12月 第1日曜	大倭地区文化祭○	健康教室・カラオケクラブ・ 絵手紙などの参加
1月 1日	初日の出参拝	
中旬	新年互礼会	新年顔合わせ
2月 中旬	防災・防犯講習会	
	大倭地区小地域ケア会議○	

資料：神代町内会総会議案書および聞き取りによる。

1) 行事名の○は、大倭地区（旧村）の活動を示す。

2) ケア会議については、2018年度は2回開催された。次年度以降も年数回の開催予定。

の徴収金が増えらる。町内会費は3,000円/年で、計237,000円となっているが、全体に占める割合は9%程度で決して高いとはいえない。収入の多くを占めるのは財産収入（全体の42%）で、会社の借地権料が該当する。これは、地区内に企業が立地するという特殊な事情によるもので、これまで当該財政の主要部分を占めてきた<sup>6)</sup>。助成金は全体の9%を占め、防犯や防災関連に対する津山市の補助や、大倭コミュニティ協議会からの支援金などである。ただし、前者の額は一時的なもので、予算額の時点では10,000円となっているため、例年の助成全体は多くない。

一方、支出の部では、公民館活動費、各種助成金、施設整備費の各部門が高い割合を示す。公民館活動費は、敬老会、運動会、防災関連の諸経費が該当する。各種助成金は、老人会が6万円、婦人会・子ども会・神友会・愛育栄養委員会が各3万円、神栄会とその他サークルが

各1万円となっている。この助成は、町内会や各行事が各種団体のサポートを得ていることとも関連し、個々の組織活動を支える役割といえなくもない。施設整備費では、本年度はゴミステーションの塗装、ふれあい広場の屋根の塗装があげられる。役員の報酬は会長3万、副会長と会計が各1.5万円となっている。町内会の役員事務としては、月1回行われる役員会があり、年間の各行事の打合せや実行委員会の立ち上げなどを行う。また、町内会役員は、大倭地区の活動にも役員としてかかわることがあるので、むしろ事務等の負担が大きい。したがって、報酬からすると町内会役員は奉仕的意味合いが強いといえよう。

町内会の組織的枠組みを図3に示した。神代町内会の役割としては、各種団体間のサポートや連携、運動会・祭りなど親睦・社会教育、防犯・施設維持などの環境整備、社会福祉に大きく分類できよう。また、それらの諸機能は、神

表2 神代地区の一般会計（2018年度）

収入		
町内会費	237,000	3,000円/戸×79戸
賛助会費	30,000	10,000円×3社
助成金	238,000	防犯カメラなど
財産収入	1,150,000	2社より
利子収入	5	貯金利息
公害対策費	70,000	1社より
雑収入	219,288	カレンダー広告料・広報配布手数料など
繰越金	798,700	
計	2,742,993	
支出		
総会費	89,742	用紙・弁当・飲み物など
役員会費	106,145	会計監査・役員懇親会・研修費など
役員報酬費	75,000	会長30,000円、副会長・会計各15,000円
公民館活動費	300,313	慶弔費・敬老会・互礼会・機関紙・文書作成・運動会など
助成金	220,000	老人クラブ60,000円、婦人会・子ども会・神友会・愛育栄養各30,000円 神栄会・絵手紙・カラオケ・健康体操各10,000円
公害対策費	70,000	地区および家庭に配布
不動産管理費	86,500	公共施設の清掃、法面草刈りなど
施設整備費	254,000	ゴミステーションの塗装、ふれあい広場の屋根塗装
消耗品費	12,091	プリンターインク
光熱水道費	143,126	水道・電気・ガス
諸税および共済	213,600	固定資産税・共済掛金
備品費	71,462	プリンターなど
雑支出	535,710	し尿汲み取り・カレンダー作成費・広報配布手数料・防犯カメラなど
計	2,177,689	

資料：神代町内会総会議案書による。

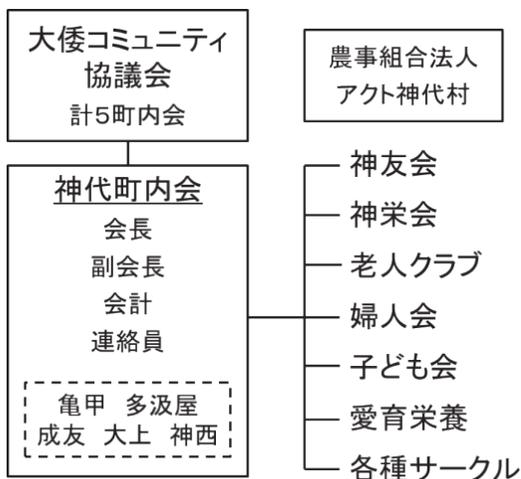


図3 神代の組織編成図

代だけにとどまらず大倭地区という範囲にもかかり、この範囲の場合、文化事業や福祉的な機能に特徴がある。すなわち、神代では、町内会を軸に各種団体がかわり、さらには広域のかつ重層的な組織構成にその多様性を見て取ることができる。

#### IV. サポート組織の成立経緯と展開

神代地区では、町内会や各行事を支える組織を各種団体とよぶ。すなわち、老人クラブ、婦人会、子ども会、神友会、神栄会、愛育栄養委員会、各種サークルが該当する。このうち、市行政とは距離をおき、住民自ら地域活動にかか

わってきた組織として、神友会と神栄会をあげることができる。本章では、この両組織を地域のサポート組織と位置づけ、まずその経緯を明らかにする。

## 1. 神友会と神栄会

神代では、戦後に復活した青年団<sup>7)</sup>が夏祭りや小学生通学道の道づくりなどにかかわっていた。しかし、年月を経るにつれて運営が難しくなり、1971年ごろに解散した(神代のむかしを語る会編、2001)。そのおもな理由としては、兼業化または脱農が進行し、日常は勤務があるので、諸行事にかかわることが難しくなったと思われる。

その後は、地区の有志(2019年現在で70代以上とみられる)がさつき会という組織を結成したが、これも次第に分裂・消滅してしまった。この当時20～30代の人びとは、職業や勤務先がそれぞれ異なるため、近隣に住んでいても顔を合わせる機会が非常に限られていた。お互いに交流する機会を設けるため、当時30歳前後であったI氏や同僚を发起人として、1980年代に神友会を結成した。組織結成の基盤としては、当初会員のなかに久米町内での綱引きメンバーがいたことをあげうる。この人たちの関係が会の結成にも寄与したとみられる。I氏も、自分より上の世代に声をかけて会員を募った。会員は当時20～30代が中心で、年2回ほど飲み会を行うなどし、互いの親睦を図った。I氏は結成当初、もっとも年下の会員であったため、会長には就任しなかった。就任したのは3代目のときであった。なお、神友会の役員は、会長1人のほか、副会長1人、会計1人、任期は2年で重任は妨げない。

1980年代以降、会の運営も軌道に乗り始める。2000年代に入り、I氏が50代になるとき脱退を決め、今度は6人ほどで新たに神栄会を結成した。

なぜI氏は神友会を脱退し、神栄会を結成したのだろうか。それは、決して仲間割れや組織内の分裂ではなく、若い人びとと敢えて距離を

おき、かれらの育成を促すことにあった。I氏らがずっと神友会に留まると、新規加入する若い世代が上の世代に気を使ってしまい、新しい発想で地域にかかわることができないと判断されたからであろう。すなわち、神友会の若い世代が地域活動を主導したり支援したりすることが企図されていたのである。この両会の交流は途絶えていない。1つあげるならば、神友会の総会後に行われる懇親会に、神栄会の会員も参加していることである。

2019年現在、神友会は20～40代の約20人で、構成員はおもに子ども会にも参加する。神栄会は24人である。聞き取りによると、神友会から神栄会への移行・加入率は9割で、このことから両会員は地域活動にかかわろうとする意識が強いことがうかがえる。

なお、当地区の公会堂当番は、2か月に1度の間隔で清掃など行う。この当番は町内会と、5つの組織(愛育栄養委員会を除く)が分担する。したがって、1980年代以降に結成された神友会と、その先輩格に相当する神栄会も、当区の重要なむらの組織に位置づけられている。

神友会と神栄会は、会員間の親睦のほか、前述のように地域活動の支援でも欠かせない存在となっている。

## 2. 地域活動の中心層と推進力

前節では、神友会と神栄会の成立経緯を明らかにした。自治組織や任意組織において優秀なリーダーが長期に留まると、かれが退いた後にその埋め合わせが困難となることがある。事実、久米町の他の地域において、そうした例がみられたという(町内会役員への聞き取りによる)。すなわち、組織の構成員がリーダーに依存してしまい、後任が育たないことがその要因である。神代のI氏が50歳を機に神友会を脱退したのは、間違いではなかった。またI氏は、50代のときに町内会長を経験している。周囲から推されての就任であった。こうした会長職の経験があるため、別の人が町内会、神友会や神栄会の長となったさいも、自分がきちんとバックアッ

プすることを心がけている。

神代における地域活動の中心層は、60代の人びとである（2019年時点）。たとえば、I氏をはじめとして、集落営農法人の代表（神田、2017を参照）、現町内会長が該当する。図2で参照したように、人口の多い階層は65～69歳、70～74歳で、この階層の地域的まとまりや地域活動の醸成が強いことが想定される。また、この3氏は、2011年に集落営農法人「アクト神代村」を立ち上げたときの構成員でもある。3氏はかねてからの飲み仲間でもあり、その親交は深かった。当法人の2016年の増員時も、そのメンバーが以前から神栄会に属していたことで、勧誘しやすかったことが考えられる。

### 3. サポートの内容面

本節では、神栄会を含め地域活動における各種団体とのかかわりと、サポート内容を見ておきたい。以下では、運動会を取り上げる（写真1）。

運動会の準備については、まず開催の1カ月前、町内会のなかに実行委員会を立ち上げる。その実行委員は、いわゆる各種団体の代表と町内会の文化部である。この委員会では、運動会当日に使用する道具の準備と手配を行い、競技メニューを決定する。また、司会、記録集計、判定、音響などの担当決めと打ち合わせを行う。運動会は、4月の第1日曜日に開催される。筆者の参与観察によれば、運動会当日の司会や競技判定、道具の用意・回収については神栄会の会員、記録・集計は婦人会のメンバーが行っていた。子ども会の親のなかには、保育や教育関係の人がいるので、進行全般にこなれている様子であった。そのサポートが強固であるのは、やはり当地に小学生が多いことも関係していると思われる（図2参照）。

このように、運動会は地区の代表的行事で、神栄会や神友会など各種団体のサポートを得て行われ、昼からは花見があるため参加者が非常に多い（2019年は120人程度）。



写真1 運動会 [2019年4月筆者撮影]

## V. おわりに

本稿では、岡山県津山市神代を例に、自治組織の地域活動やサポート面、運営の継承に注目した。

神代には、自治組織として全戸加入の神代町内会があり、地区の諸行事には運動会や花見、納涼祭、神社大祭などがある。この町内会を中核に、いわゆる各種団体がおのおのの地域活動に参画する。なかでも、地区有志の神友会と神栄会の両組織が、地区の自治活動を支えてきた。現在、神友会と神栄会は、公会堂の当番、運動会などで重要な役割を果たしている。

この両組織をサポート組織として、地域の活動には多様な世代の人びとがかかわり、その運営が継承されてきた。その契機の1つは、I氏が50歳を機に神友会を脱退し、新たに神栄会を結成したことである。すなわち、若い人たちとときに距離をおき、かれらの思いや考えを尊重しつつ、地域活動の主導を担うことが企図されていたのである。このことはまさに「地域づくりは人づくり」を体現する内容であるといえる。また、このような地域づくりは、リーダー層となった人たちの地域への思いと、地元住民の親交やかかわりを重視することからなし得たものといえる。

人口減少下にある日本では、各市町村を対象に、地域創生の計画が矢継ぎ早に遂行されよう

としている。実際、地域づくりは数年や5年という計画で、早急に成しうるものであろうか。もしそうであるとしても、地域づくりを担う人や組織の基盤が揺らぎ、停滞するのも早いように感じられる。本稿では、40年近く前から有志や組織が活動してきた点を評価してきた。一般化には慎重にならざるを得ないが、本稿で得た知見は、長い年月のなかで人や地域が醸成され、そのなかで地域活動の運営や継承がなされてきたことである。地域づくりは10年以上の一定期間を要することを念頭におき、外部からの支援や働きかけを行っていくことが求められる。

本稿では、もっぱら地域づくりの推進面に光をあててきたが、地域の課題も浮上している。その1つは、神代町内会など次期役職を決めるのが難しくなってきたという。役員の仕事負担が大きいことも一因であろう。今後は、そのサポートのあり方も含めて議論すべき点である。

[追記] 調査では、神代地区のみなさまにお世話になりました。心よりお礼申し上げます。事実、2020年から新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大で調査が中断されました。今回、調査の再開でようやく公表することができました。ポストコロナの調査のあり方など、今後も検討していきたいと考えています。

## 注

- 1) NPOのなかには、町内会や自治会のような自治組織もあらわれてきている。たとえば、森(2006)では、鳥取県智頭町において従来の地域活動を引き継ぎ、小回りのきく小さな自治体をつくるためにNPO法人となった自治組織を紹介している。
- 2) 調査にあたっては、まず2016年に集落営農を対象にしつつ、あわせて地域活動の聞き取りを断続的に行った。その後、2019年2月、4月、2022年10月に聞き取り(町内会長やI氏など)、2019年4月の運動会・花見、町内会総会、同年10月秋季大祭の参与観察も行った。

- 3) 神代は、明治22年の町村制時に大倭村大字神代となった。その後数回の合併を経て、1955(昭和30)年に久米町が誕生した。
- 4) この広場は、もともと神代グラウンドとして1953年に造成された。その後、荒廃がすすんできたため、再整備したものが現在のふれあい広場である。
- 5) 大祭の運営には、町内会役員と各字2名からなる当屋が担当する。役員と当屋は、事前に会費の収集(1,500円/戸)と餅、野菜、酒の準備をする。なお当屋とは、祭礼のとき特別の席をあたえられる一部の氏子集団のうち、年番で宮の管理や祭礼にあたる家のことをさす。ただし、現在の当屋は、該当するすべての字から選出されているようである。
- 6) 区誌によると、誘致企業のP社では土地の貸与料が発生しており、「神代自治会にとって重要な財源とされて今日に至っている」ことが述べられている。
- 7) 1946年当時の団員は、男女あわせて約60人であった。

## 文献

- 神田竜也(2017)「岡山県津山市における集落営農組織の特質と課題—2つの法人組織の例から—」奈良大地理23 pp.44-55.
- 神代のむかしを語る会編(2001)『むかし神代』久米南町神代自治会 234p.
- 森 裕亮(2006)「地縁組織のNPO化の現状と課題(1)—鳥取県智頭町の事例から—」北九州市立大学法政論集34-1・2 pp.63-76.
- 森岡清志(2008)「地域社会の未来—コミュニティ行政の限界と新しいコミュニティ形成—」(森岡清志編『地域の社会学』有斐閣) pp.271-296.